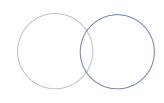
No.47 March 2005





NEWSLETTER

International Lake Environment Committee

=財団法人 国際湖沼環境委員会=

このニュースレターには、英語バージョンもあります。

浜中裕徳理事長、内藤正明副理事長が就任

ILEC設立時から理事長を務めてこられた山崎 圭理事長、理事・副理事長を務めてこられた吉良龍夫副理事長は昨年末に退任され、その後任にそれぞれ浜中裕徳氏(慶應義塾大学環境情報学部教授、前環境省地球環境審議官)、内藤正明氏(佛教大学社会学部教授、(仮称) 滋賀県琵琶湖・環境科学研究センター準備顧問)が就任されました。また、小谷博哉専務理事ほか11名の理事、監事2名および評議員13名が就任され、新体制(第10期)がスタートしました。

ILEC理事長新任挨拶

浜 中 裕 徳

このたび山崎 圭前理事長の後任として財団法人国際湖沼環境委員会(ILEC)の理事長を仰せつかりました。誠に身に余る光栄であり、同時に、職責の重さに身の引き締まる思いです。

ILECは、山崎前理事長の下で大いに発展し、湖沼の持続可能な管理と保全に関する国際協力の分野で世界的に大変重要な役割を果たしています。世界の各地域で世界湖沼会議を開催するともに、UNEP等との共同事業により、世界湖沼現況調査報告書、コンパクト版世界湖沼データブックや湖沼管理のためのガイドラインブックシリーズを発行してきました。ILECはまた、環境教育や専門家の研修の推進に大きく貢献しています。山崎前理事長や、歴代の滋賀県知事をはじめとする関係者の皆様方のご尽力に深く敬意を表する次第です。

可能な管理と保全は21世紀における最も重要な課題の一つと言うことができます。

このような状況において、ILECが引き続き世界的に重要な役割を果たし



ていくために、理事長として微力ながら最善を尽くす所存でありますので、 関係する皆様方におかれましては、 益々のご指導とご協力をいただきます よう何卒官しくお願い申し上げます。

今号の

トピック

●浜中裕徳理事長、内藤正明副理事長が就任

- ●退任挨拶 山崎 圭(前理事長)
- ●アイレックとともに 吉良龍夫(前副理事長)
- ●イラク支援水質管理研修を実施
- ●インドネシアでワークショップを開催
- ●世界の湖 ボストーク湖
- ●第63回理事会、第55回評議員会が開催
- ●第11回世界湖沼会議 第2回アナウンスメント
- ●第15回JICA湖沼水質保全コース終了

退 任 挨 拶

山崎

圭 (前理事長)

この度、1987年9月の創設以来17年余りにわたった(財)国際湖沼環境委員会(ILEC)理事長の職を退任することにいたしました。

ILEC創立当時は、我が国の環境問題についての国際協力が緒についた時期でもあり、私どもは、その後の国の歩みと歩を一にしつつ、着実に足元を踏み固めてまいったと存じます。その流れに逐一関わりを持てましたことは、私の人生の中で最大の喜びとするところであり、誇りに感じております。ILECは、そしてその責任を担わせていただいた私は、この17年間、国内外で本当に多くの方々との出会いがあり、またご支援を頂きました。そうした中で、水問題と湖沼問題が国際社会において一定の地歩が確立されつつある現

状に言い知れぬ満足感を感じております。また、ILEC創設の最大目的の一つであった「世界湖沼会議」も11回目を迎えんとしております。

この時期、私の後 任として最適任者を 迎えることができ、 安心して後事を託し つつ、改めてで事を託し のこれまでのご厚情 にお礼を申し上げ、 退任のご挨拶とさ ていただきます。



アイレックとともに

吉良龍夫(前副理事長)

第1回の世界湖沼会議(1984)で、 当時のUNEPの事務総長トルバ博士が 「この会議の精神と成功を形にして残 してほしい」と要望され、滋賀県の武 村正義知事がただちにそれを実行に移 されてILECが生まれたことは、よく知られています。私はこの会議の実行委員長を仰せつかっていましたので、自然ななりゆきでILEC誕生のお手伝いもすることになりました。最初の設



科学委員長として 私が心がけたのは、 委員の方々に十二分 に意見を述べ、抱い ておられるアイディ アを残らず出してい

ただくことでした。必然的に会議が長 くなり、簡単なことはもっと委員長が テキパキと決裁すればよい、という忠 告ももらったのですが、どんな些細な 議題からも、思いがけない発想がでて きて、このやりかたを変えることがで きませんでした。おかげで、いずれ劣 らぬエクスパートである委員の皆さん のすぐれたアイディアから、世界の湖 沼データベースの構築、湖沼管理のガ イドライン・シリーズの出版、6ヵ国 の学校での環境教育の試行プロジェク トといった、これまで着想はあっても 実行が伴なわなかった事業が生まれ、 その成功によってILECの存在価値を 内外に認識してもらうことができまし

財団法人の財政経営が困難な時代になって、事務局の方々のご苦労は察するに余りがあります。科学委員長を降りてからは、事務能力不足の私は、この事態に対してなんの貢献もできず、今回副理事長を引かせていただいて正直ホッとしているところです。新理事会と科学委員の方々が、これまでのスタッフが作ってきた実績と信用の上に立って、斬新なアイディアで勝負してくださることを期待しています。長い間のご協力ありがとうございました。

イラク支援水質管理研修を実施

I LECはUNEP-IETCの要請を受けて、2004年12月6日~17日にイラクから28名の研修生を招いて"水質管理研修"を実施しました。これはUNEPが日本政府の支援を受けて実施している「イラク湿原の環境管理支援」のプログラムの一環であり、UNEPにおける執行機関であるUNEP-IETCが開催し、主としてイラク環境省や地方の関連機関の役人、大学関係者などを対象に、イラク湿原において適用可能な水質管理と関連政策の策定に関する知識の習得をめざし、彼らの能力やスキルの向上を目的としたものです。

イナ修では17の講義と5つの現場実習が行なわれ、海外から2人、国内からは13人の専門家が講師として招かれました。講義は、イラク湿原の重要性を説くと共に、水質管理とモニタリングについての基礎から応用に至る広範囲なテーマを網羅するものとなりました。GEMS/Water、WHOから参加した専門家は、イラク湿原の水問題に対して全地球的な視点から国際的な協



力の必要性を提起しました。日本国内からは大学、各種機関の専門家が参加し、これまでの日本の水管理や水質モニタリニグの経験や教訓、湿地の役割、琵琶湖の事例などを紹介しました。

また参加者は、水質および水量管理施設、水処理施設、ゴミ処分場などを見学するとともに、滋賀県のNPOを訪問し、水管理における住民の果たす役割についても学びました。現場実



習は、日本のシステムや事情を直接自 分の目で確認できるとともに、また現 地の人々との出会いを楽しむ場ともな りました。また研修生は、國松善次滋 賀県知事を公邸に訪問する機会を得、 滋賀県の琵琶湖保全の施策について活 聴くことが出来ました。研修生から は、「これらの経験はすべて自分たち にとって大変有意義なものであり、今 回の研修が、自分たちがイラクに帰 て今後のイラクの湿原再生に向けて仕 事を進める上で大いに参考になる」と の声を聞くことができました。

→回の研修は、準備期間が短く、また28人という多くの研修生を少ないスタッフでお世話しなければならないこと、さらに彼らの多くが外国での研修ははじめてであったことなど、ILECにとっても多くの困難がありました。しかしながら、これらの困難を乗り切って、無事研修を終え、イラク



の参加者から感謝の気持ちを表された とき、それまでの苦労が報われた気が しました。ILECはこの研修を通じて 文化・風土の異なるイラクの人たちと の友好を深めることができたことをう れしく思っています。

インドネシアでワークショップを開催

I LECは、2004年12月8、9日にインドネシアのジャカルタで世界湖

沼ビジョンのフォローアップ活動の一つとして"インドネシアにおける持続

可能な湖沼管理の推進"をテーマにワークショップを開催しました。このワ



専門家によるプレゼンテーション(左上:開会メッセージを贈るILEC松本氏)

ークショップはインド ネシア国内で湖沼保全 活動に従事している団 体や個人のネットワー クである「インドネシ ア湖沼フォーラム」と の共催によるもので す。ワークショップは、 インドネシア環境省の 支援を受けて国レベル の事業として実施さ れ、他の政府機関や国 際的あるいは地域で活 動しているNGOなど の支援も得て開催され ました。ワークショッ プにはインドネシア各 地から約100人の湖沼 関係者および3人の国 際的に活躍している専 門家が参加しました。

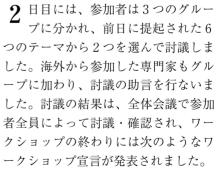


グループディスカッションの様子

フークショップはインドネシア湖沼フォーラムのハルヤチィニンシ・モエジョドさんの挨拶で始まりました。ILECの松本氏はインドネシア湖沼ビジョンの策定に期待を示し、このワークショップがその第一歩となるよう訴えました。来賓の挨拶に続いてインドネシアの環境副大臣であるスダリヤーノ氏がインドネシアの現状と課題について講演しました。

第1日目はインドネシアにおける最近の湖沼問題を共有し、国際的な経験に学ぶことに焦点が置かれました。6人のインドネシアの専門家が、1)湖沼の生態系保全、2)地方分権化時代における湖沼管理、3)湖沼管理への市民参加、4)水量と水質、5)湖沼管理における民間の役割、6)国際協力、についてそれぞれ講演しました。また3人の海外から招待された専門家は自分たちの専門的な知識と経験

を話しました。井手慎司氏(滋賀県立 大学)は日本の自治会などの例を挙げ ながら、湖沼管理における地域住民の 役割について、また中島拓男氏(琵琶 湖研究所)は湖沼生態系の役割を強調 し、琵琶湖の経験を紹介しました。フィリピンのラグナ湖公社のアデリーナ・サントスさんは、フィリピン最大 の湖であるラグナ湖の保全における同 公社の役割と活動を紹介しました。



- 1) インドネシア湖沼ビジョンの策定 に取り組む
- 2) 湖沼の持続的で賢明な管理のため に能力向上を図る
- 3) 湖沼の持続的で賢明な管理の推進 に向けて一般、特に地域住民の参加 を促進する
- 4) 国際、地域、国レベルでネットワークを拡大し、利害関係者の協力を拡大する



インドネシア以外からも多くの参加がみられた

世界の湖 ボストーク湖 ―南極大陸

トーマス・バラトール (ILEC 研究員)

土星の最大の衛星タイタンで発見された湖の記事が最近の新聞に出るようになって、私たちの思いは「異境の」湖に向かいつつある。この「世界の湖」のシリーズで、かつて扱われたことのない大陸の湖について述べるのに、今ほどふさわしい時はない!

タホ湖より深く、マラウィ湖やバイカル湖より起源が古い湖を想像してみよう。それがボストーク(Vostok)湖だ。この湖は、南極の氷床の下4,000 mの深さにあり、したがって、その表面を見たり採水したりした人は、まだ誰もいない。おそらく読者の大部分は、その存在を耳にしたこともないだろう。

ボストーク湖は、南極の氷床下にある70ほどの湖のうち最も大きい。面積はほぼ1万㎡で、深さは1,200mもある。上にかぶさっている氷床の莫大な厚さ(4,000m!)の圧力で、-3℃の水は液体のままにとどまっている。不凍結状態の維持に地熱が大きな役割を果たしているとは考えられていない。湖の起源は200~300万年前と推定されており、世界最古の湖の候補の一つである。50万年前に南極大陸が全面氷結していらい、この湖は地球の部分から隔離されてきた。

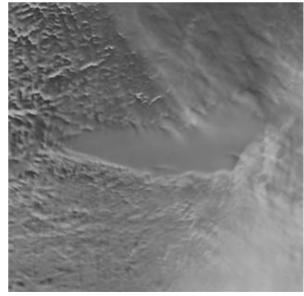
こうした条件によって、ボストーク 湖は純潔に保たれ、生物の進化にとって独自の場となった。ボーリングで得た湖の表面水起源の氷のコア試料には、細菌が含まれていた。ただし、採取用の機器からの汚染は排除できていない。もし湖に生命が存在するならば、長い隔離の歴史が固有の生物を進化させている可能性が高い。この可能性が真実なら、この湖は、他からの感染をまぬがれた地球上最後の生命の保存庫として、かけがえのない価値をもつことになる。

またこの湖は、地球外の生命を理解 し探索するためのモデルともみなされ る。木星の衛星エウロパには、その凍 結した表面の下に液体の海が存在する と考えられている。この衛星で水が液 状を保っているのは、木星をまわる軌 道が真円でなく偏心形で、そのために 生じる潮汐が生み出すエネルギーのせ いである。地球上では、水のあるとこ ろには生命がある。そして、エウロパ の海もまた生命をはぐくんでいるだろ うと、多くの人は期待しているのであ る。氷床下の湖からどうすれば汚染さ れていない試料が採れるのかを、この 地球上で研究した経験は、どんな形で あれエウロパへの探査行にとって、き わめて貴重な参考となるだろう。

さらに、この湖の隔離状態は、その 湖底堆積物のコアに過去の地球の気候 の記録が、攪乱されることなく保存さ れていることも意味する。科学者は、 その堆積物から得られる情報を利用し て、過去の気候についての知見や将来 の気候の予測の改善に役立てることが できよう。

ボストーク湖に対す る最大の脅威は、試料 採取に伴なう汚染の可 能性である。気候の研 究者たちは、氷のコア から地球の過去の気候 についての情報を得る ために、湖の存在が確 認される以前から、湖 の上にある氷層のボー リングを実施してき た。しかし、1998年に は、生物学者からの要 請で、ボーリングは湖 の上方、100mまでに 止めることになった。 ボーリングの穴や掘削 具は消毒されてなく、潤滑油・燃料・ 地表の生物などでたっぷりと汚染され ている。だから、いまあるボーリング の穴から水が湖にとどけば、湖は毒性 物質で汚されるばかりか、汚染生物は 最低限でも採取試料を混線させ、最悪 の場合は侵入種として定着するだろう。

幸い、いかにしてこの湖を汚染する ことなく調査するかの計画はまだ立案 中で、ボーリングの実施はまだ保留さ れている。南極研究の現状からみて、 どのような調査も国際チームにより行 なわれる可能性が非常に高い。湖への 距離の遠さと、機器・作業を超清潔に する必要性を考えると、試料の採取に はおおきな経費が必要だろう。しかし、 探求心が困難に打ち勝って、我々は、 近い将来にいつかはボストーク湖の秘 密を知ることになり、その成果は、人 類の環境史のなかの象徴的な1章とな るだろう。我々は、この湖をそこなう ことなく探査することができるだろう か? それとも、このシリーズに出て くる他のすべての湖のように、汚染し てしまうことになるだろうか。



氷層を透かしてレーダー撮影したボストーク湖 (RADARSATによる)

参考:全米科学財団 (NSF) は、ボストーク湖関連の各種資源慣例の情報サイト、 http://www.nsf.gov/od/lpa/news/02/fsvostokresources.htm. を設けている。

Bell, R.E. et al. 2002. "Origin and fate of Lake Vostok water frozen to the base of the East Antarctic ice sheet." *Nature* 416: 307-310. Gavaghan, Helen. 2002. "Life in the deep freeze." *Nature* 415: 828-830.

第63回理事会、第55回評議員会が開催

去る3月22日にILECで理事会・評議員会が開催され、本年1月にスタートした新たな理事、評議員の方々が出席され、2004年度予算の補正をはじめ2005年度の事業計画や予算について審議が行われ、全議案が可決されました。

2005年度の主な事業としては、アフリカ(ケニア)で開催する第11回世界湖沼会議の開催、JICAから委託を受けて実施する第16回湖沼水質保全研修および第6回環境教育研修、世界各地域への"世界湖沼ビジョン"の普及等があります。また、新たな取組としては、"世界湖沼データベース"の改善を図るためデータベースと知識ベースとのつながりを有する独自の特徴あるシステム構築に向けて検討を開始することになりました。

ILECの新しい役員は、次の皆さんです。

理事会・監事メンバー (敬称省略、順不同)

(慶應義塾大学教授) 理事長 徳 浜 中 裕 副理事長 内藤 正 眀 (佛教大学教授) 専務理事 小 谷 博 哉 (元滋賀県理事) (元駐ナイジェリア大使) 玾 事 佐々木 高 久 玾 事 尾 田 栄 斊 (日本水フォーラム事務局長) 理 邊 正 老 事 渡 (国立環境研究所研究領域長) 三郎 理 事 松 井 (京都大学教授) 中 村 正 久 理 事 (琵琶湖研究所長) 理 事 Ш 嶋 宗 継 (滋賀大学教授) 玾 事 三田村 緒佐武 (滋賀県立大学教授) 玾 事 松 下 和夫 (京都大学教授) 由紀子 (京都精華大学教授) 理 事 嘉 \mathbb{H} 玾 事 中 幹 康 (東京大学教授) Ш 玾 事 中 洋 一 (滋賀県琵琶湖環境部管理監) 田 監 事 紘 一 (滋賀銀行頭取) 高 \mathbb{H} 監 事 岸 本 與志男 (滋賀県出納局長)

評議員メンバー (敬称省略、順不同)

野 (元駐スウェーデン大使) 股 景 親 和 \mathbb{H} 英太郎 (地球環境フロンティア研究センタープログラムディレクター) 基 之 (放送大学教授) 鈴 木 (滋賀経済産業協会副会長) 森 建 司 淳 (立命館大学教授) \mathbb{H} Ш 村 公太郎 (リバフロント整備センター理事長) 竹 島 孝 飯 (国立環境研究所理事) 堀 越 昌 子 (滋賀大学教授) 玲 村 子 (ラムサールセンター日本事務局長) 中 津 野 洋 (京都大学教授) 文 彦 丛 (龍谷大学教授) パー・バッケン (UNEP/DTIE次長) (滋賀県琵琶湖環境部長) 伊藤 潔

第11回世界湖沼会議 第2回アナウンスメント

10月31日~11月4日にケニアのナイロビ市にて開催を予定している第11回世界湖沼会議の第2回アナウンスメントが発表されました。詳しくは、公式ホームページ (http://www.ileckenya.go.ke/) およびILECホームページ (http://www.ilec.or.jp/jp/wlc_jp/2nd_jp/2nd_jp.html) をご覧ください。

■ 予定されている分科会

第1分科会:ガバナンスと水資源管理 第2分科会:湖沼科学研究とモニタリング 第3分科会:貧困の撲滅とエイズ対策など

第4分科会:湖沼管理の緊急的課題(災害・難分解性有

機化学物質および地球温暖化等)

第5分科会:湖沼管理への住民参加

第6分科会:湖沼流域管理イニシアティブ

第7分科会:湖沼生態系の健全性

第8分科会:湖沼への脅威-特にアフリカの現実に焦点

を当てて

第9分科会:地域文化

特別分科会 特別要請分科会

■ エクスカーション

- 会議前エクスカーション●
 - 1. 航空便による2泊3日のヴィクトリア湖視察
 - 2. バスによる 2 泊 3 日のナイブァシャ・ナクル・ボゴリア各湖視察
- 会議後エクスカーション●
 - 1. 航空便による2泊3日のモンバシャ市視察
 - 2. バスによる2泊3日のケニア山地域の七叉ダム 視察

■ 世界湖沼会議開催までの主なスケジュール

- 4月 第2回アナウンスメント:発表論文のアブストラクト募集
- 5月 第3回アナウンスメント:参加登録開始、論文の 提出開始、詳細プログラム発表
- 7月 早期登録締め切り:追加提出論文の公開、詳細プログラムの改定
- 9月 事前登録締め切り
- 10月 中旬以降は当日登録

第15回 JICA湖沼水質保全コースを実施しました

本年で15回目を迎えた。第15回JICA湖沼水質保全コースが、平成17年3月17日をもって終了いたしました。このコースは1月17日から実施された、約2ヶ月間の研修コースです。本年は、カンボジア、ケニア、スリランカ、シリア、タンザニア、タイの6カ国10名の研修員が参加しました。

この研修コースは、開発途上国において、湖沼(含人工湖)の水質保全に関連して、保全施策の立案や管理計画の策定などを担当する技術系行政官や指導的立場にある研究者を対象としており、本年の研修員は各国の湖沼保全担当省庁の職員や分析官が参加しました。



また研修期間中は、湖沼の水質管理に関する測定技術、 汚濁防止技術、予測技術、管理技術などについて、より高 度な学習と演習を行うことにより、研修員に、湖沼の水質 の適正な管理のための政策立案に必要な基礎知識を修得さ せ、これにより各国の指導的技術者の質的向上に寄与する とともに、湖沼とその環境の適正な管理と均衡ある発展に 貢献することを目指します。

研修の最後に研修員はファイナルレポート (アクションプラン) を作成し、研修の成果と行動計画を自国に持ち帰ります。





INTERNATIONAL LAKE ENVIRONMENT COMMITTEE